

④ 『寺子屋の先生』

峠では危うく罪人になるところだった。けれど善六爺さんのひた向きな女房への情愛に打たれ、手間取ってしまった二刻の無駄など全く気にならなかった。ただ宿に入るのが遅くなっただけだった。

明け方近くになって雨になった。その雨は時間を追うごとに激しくなつて、旅籠の板屋根を叩く音が太鼓の乱打を思わせる大音量になった。

夜明けまでまだ間があるはずだが、とても寝ていられる音ではなかった。行燈に灯を入れてみた。煤けた壁に映る巨大な自分の影が、少し揺れながらミチを見下ろしていた。その影と二人で、狂つたような雨音を聞きながら夜明けを待った。雨は午後になつても止まなかった。降り込められた宿泊客が、入れ替わり立ち替り、宿のあがりがまちまで降りて来て外の様子をうかがい、諦めては階段を上がつて行った。

激しい雨音に混じって呼び交わす人の声が幽かに聞こえて来た。川が出合う辺りで水が溢れそうなのだと、女中達が不安げに話している。

旅籠の主も気掛かりなのだろう、蓑と笠でしつかり準備を整え、勢いよく雨の中に飛び出して行った。

主人が返つて来たのは日暮れ近かった。その頃には、激しかった雨も大方止んで、王ヶ鼻(美ヶ原)の上空には所々に青

空が見え始めた。

どうにか川は溢れずに済んだようだった。

翌朝、宿泊客たちは一日の遅れを取り戻そうと、駆けだす勢いで次々に宿を出て行った。最後にミチが宿の敷居をまたいだ時は、既に街道の先が見通せるまで夜は明けていた。

ミチの目的地が近づいている。長久保まで歩いて大門川を渡り、上田で宿を取ったあと、もう一日歩けば着くはずである。

ところがその目論みはずれた。和田宿の川は溢れる寸前で持ち堪えたが、大門川にかかる橋は昨日の大雨で対岸が洗われ、橋の一部が流されて渡ることが出来なかった。

だけどもミチに焦りはなかった。ここまで来れば一日や二日遅れたところで大して変わりはない。

別の道を探ねようと往還に引き返す途中で、農家の女房らしい女に出会った。

「橋が渡れないのですが、上田に行く道を教えていただけませんか？」と尋ねると

「生憎だったね。一里ほど往還を行けば北に上る山道があるにはあるけど、人の話しじゃ悪い奴が出るらしいよ。ちょっと遠回りだけど塩名田まで行って北に向かった方が安全だよ。私も善光寺に参る時はその道を行くね」

有難い情報だった。礼を言つて歩きかけたミチに女が声を

かけた。

「ちよつと悪いんだけどさ、この手紙読んでくれないかね。庄屋さんに読んでもらおうと思つて出て来たんだけど、尼さんに読んでもらえば行く手間がはぶけるしさ」

お易い御用だった。広げてみると尾張に石工として働きに  
出ているご亭主からだつた。

「晦日には帰るつて書いてありますよ。あと三月、待ち遠しいですね」

「そうですか、無事なんですね。よかつた・・・よかつた」  
女はそう言つて微かに頬をゆるめ、小さく何度もうなずいた。

「私も読み書きくらい出来なきやね。こうして便りを貰つても自分で読むことが出来ないのが情けない。もつとも亭主だつて満足に読み書きができる訳じゃないんだよ。これだつて親方か誰かに書いてもらったものさ」

「今からでも、いくらでも覚えられますよ」

「そう言うけどさ、一体どうやつて覚えればいいのか分からないのさ。庄屋に頼めば教えてもくれようけど、何たつて遠慮だもんね」

「そうでしょうね。仮名だけでよければ私がお手本を書いてあげます。四、五日眺めていれば取り敢えず仮名だけは読めるようになると思いますよ」

「本当かね？本当だと嬉しいね。本当にお手本を書いてく

れるのかい？」

「道を教えていただいたお礼です。ちよつと待つて下さいね」

そう言つてミチが背中に背負つた荷物を降ろそうとする  
と

「折角教えてもらうのに道の真ん中ではあんまりだ。うちはすぐそのあの家だが、うちでどうかね？ああ、私の名前はカヨというの。よろしくね」と女はミチを自宅に誘つた。

もともと絵が得意だつたミチは、カヨの家の縁側に腰をおろすと、仮名一文字ずつに簡単な絵を添えた表を作つた。

い、には井戸の絵を、ろ、には蠟燭をという風に。

それを受け取つたカヨは、まるで金銀財宝でも貰つたような喜びようだつた。

「嬉しい！これなら簡単に覚えられそう。もうじき二人の子供達も帰つて来るので、三人で一緒に覚えませう」

「仮名は四十八文字しか有りませんが、漢字はその何倍も何十倍もあります。でも、全部はとも覚えられません。日頃よく使う文字を書いてそれにふりがなを付けておきますから、この仮名の表を使って読んで下さいね。稽古は、地面に木の枝か何かで書けば、消してはまた書くことができますね。そうやつて繰り返し練習をすれば、その内すらすと読めるようになります」

「早くそうなるよう三人で稽古をしなくちゃ。書いてもら

つてる間に夕飯の仕度をして来るけどいいかな」

カヨは溢れるほどの喜びを顔に浮かべたまま、かまどの方向に向かった。

ミチが数十個の漢字を書き、それにふりがなを振っている途中で二人の男の子が、用足しから帰って来た。七歳と四歳、安吉と壮太といった。安吉は縁側のミチに近づくと

「おばさん何やってるんだ？」と訊いた。

「あなた方のお母さんが、手紙を読めるようになりたい、と言うので字を覚える為にお手本を書いてるところですよ。三人で覚えると言っていましたよ」

「えっ？俺たち字が読めるようになるの？本当かい？」  
安吉が目を輝かせた。そして弟に向き直ると

「壮太、聞いたか？俺たち字が読めるようになるんだつてよ。嬉しいな。そしたら遠くで働いているお父うに手紙が書ける。お父うだつて俺たちのことを心配してるけど、何も知らせることが出来ないもんな。壮太よかつたな。お前も書けよ」そう言つて弟の手をつかんで引き寄せ、ミチが書いている手許を食い入るように見ていた。

一通り書き終えたミチは、思いついて別の紙に簡単な文字を書いた。

「これを読むにはこちらの表を使います。いいですか？表のこれは、は、という字です。だから隣に葉っぱの絵が描いてあります」

「そうか、そうするとこれは、き、だね。木の絵が描いてある」

「そうそうその通り。そうやって読むとこれは何と書いてあるかな？」とミチは今しがた書いた一枚の紙を安吉に渡した。

「えーと、これは、お、だな。これは、れ。これは、えーと、は、だ。次が、や、で、その次が、す。それからさつき、き、だね。そして、ち。お、れ、は、や、す、き、ち。俺は安吉？読めた、読めた！おつかあ読めたぞ。俺は安吉で書いてある。読めたーっ」

安吉は今読んだばかりの紙を握りしめて母親のもとへと駆け出した。呆気にとられた表情の壮太も続いた。

にわか寺子屋の先生は、この上なく幸せな気分二人が家に駆け込む姿を眺めていた。